

第1章

研究の全体像

1 本校の校内研究

本校では、1つの校内研究主題に基づいて「課題研究」「プロジェクト研究」「調査研究」「寄宿舎の研究」(以下これらを「4つの研究」と言う。)に取り組むことを基本としている(表1)。校内には教務(学校)と舎務(寄宿舎)それぞれに研究担当部署があり、校内研究の企画・推進は両部署が連携し、調整を図りながら行っている。研究推進委員会は、4つの研究が相互に連携して推進されるよう連絡・調整を行う場としている。それぞれが関連している(図1)。

課 題 研 究	本校の研究の中心的研究と位置付けている。本校における教育実践等のニーズの優先度などに応じて設定された実践研究であり、日常の指導実践と最も密接に関連する研究である。
プロジェクト研究	課題研究だけでは解決できない課題、もしくは別の課題を解決するために、その課題に関係する組織で進めるものと位置付けている。学校教育の動向や本校における教育実践等のニーズに基づく緊急の課題に関する実践的・総合的研究であり、校内部署の横断的なプロジェクトチームを編成して実施することもある。取り組むべき課題があるかどうか、どのような組織で取り組むかといったことは、年度により異なる。
調 査 研 究	文字通り、調査による研究である。校内外における教育実践等に関する情報を、資料・統計として調査及び研究するものであり、研究内容に関する専門性の高い部署が担当する。取り組みについては年度当初に検討して決定している。
寄 宿 舎 の 研 究	寄宿舍研究担当を中心に、校内研究主題及び学校が行う研究の流れに沿う形で取り組むものと位置付けている。また、研究推進委員会を通じて学舎の情報交換や連携を図っている。

表 1 本校の校内研究

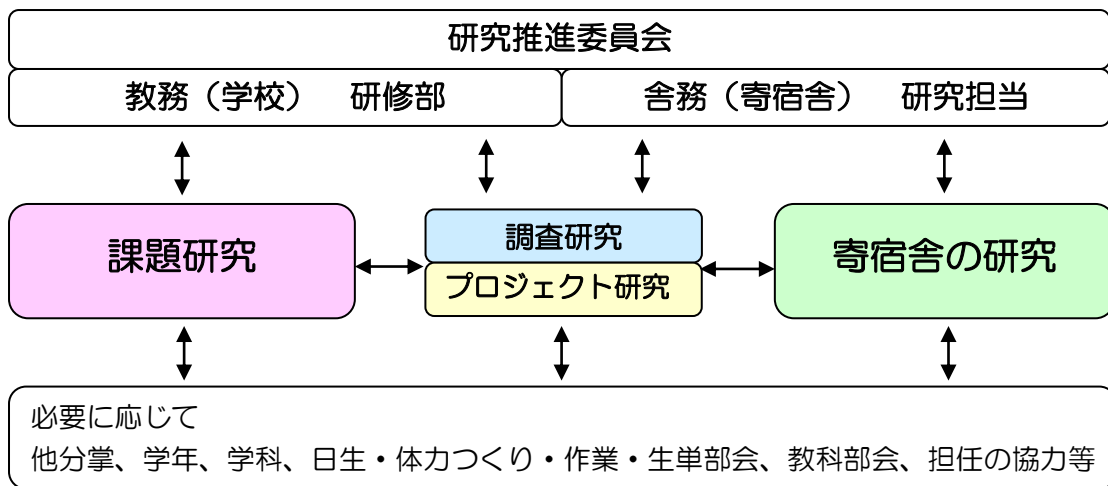


図 1 本校の校内研究組織

4つの研究を進める研究組織は、研究主題や内容によって変化する(表2)。また、研究の方法としては、理論研修(学習会)、研究授業、事例検討、教材・教具の開発・工夫などがある。各研究組織は、研究の内容に合わせて方法を選択し、ときには組み合わせている。

	研究主題	概要（主な研究内容）	研究の種類（研究組織）
第1次	【平成9～10年度】 生徒一人一人の発達段階・特性等に応じ 社会参加・自立を促す教育課程の編成は いかにあるべきか	教育目標の具現化、教育課程の基本 方針、指導内容の選択・組織、個別 指導計画の作成、地域環境・素材を 生かした教育活動	・課題研究（形態部会、 教科部会） ・調査研究（進路指導部） ・寄宿舎の研究
第2次	【平成11～13年度】 生徒一人一人が自立し、社会参加できる 力を育む授業づくりと教育課程の編成は いかにあるべきか	教育課程の編成、授業の実践と検証、 個別指導計画の充実、現場実習及び 進路状況の把握	・課題研究（形態部会、 教科部会） ・調査研究（進路指導部） ・寄宿舎の研究
第3次	【平成14～16年度】 生きる力を育む指導の研究	総合的な実態把握、指導課題の具体 的設定と指導内容の関連、単元・題 材指導計画の工夫、個別化と集団化 が最適化された授業作り	・課題研究（学年部会） ・調査研究（進路指導部） ・寄宿舎の研究
第4次	【平成17～20年度】 授業作りに活かす、教師の専門性の向上 を追求する実践的研究	課題単元の教材開発、作業工程分析 の充実、個別的教育支援計画等の様 式及び作成に関する研究、体力つく りの見直し	・課題研究（形態部会） ・P研究（CO+進路部代 表、体力づくり部会） ・調査研究（進路指導部） ・寄宿舎の研究
第5次	【平成21～23年度】 社会参加・自立を目指した働く力の育成	教科及び領域・教科を合わせた指導 の授業研究、体力づくりの見直し、 指導内容表の検討、教育支援計画・ 指導計画・通知表のあり方の整理	・課題研究（学年部会） ・P研究（体力づくり部会、 研推委、指導計画WG） ・調査研究（進路指導部） ・寄宿舎の研究
第6次	【平成24年～26年度】 社会の変化に対応できる力を育てる 実 践的研究	キャリア教育の指針「今養版キャリ アプランニング・マトリックス」の作 成、指導内容表の検討、作業学習評 価の見直し、教育課程検討、校内組 織検討、事例研究	・課題研究（形態部会） ・P研究 ・調査研究（進路指導部） ・寄宿舎の研究
第7次	【平成27年～29年度】 卒後を見据えたキャリア発達を促す指導 法の研究 -協同学習と生活指導の充実を目指して-	協同学習の観点を取り入れた授業研 究・改善、キャリア教育の指針「今 養版キャリアプランニング・マトリ ックス」の改訂、卒業生の実態調査	・課題研究（形態部会） ・P研究 ・調査研究（進路指導部） ・寄宿舎の研究

（Pはプロジェクトの略 / COはコーディネーターの略 / WGはワーキンググループの略）

表2 本校の校内研究のあゆみ

2 第8次研究

(1) 研究主題

キャリア発達を促すためのカリキュラム・マネジメント
～新しい職業学科として社会に開かれた教育課程の構築を目指して～

(2) 主題設定の理由

社会に開かれた教育課程を実現するために、各学校においては「カリキュラム・マネジメント」が求められている。これは、学校全体として、教育内容や時間の適切な配分、必要な人的・物的体制の確保、実施状況に基づく改善などを通して、教育課程に基づく教育活動の質を向上させ、学習の効果の最大化を図るものである。具体的には、教科等の目標や内容を見渡し、特に学習の基礎となる資質・能力（言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等）や現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力の育成のために、教科等横断的な学習を充実させたり、主体的・対話的で深い学びの充実のために単元など数コマ程度の授業のまとまりの中で、習得・活用・探求のバランスを工夫したりすることである。

本校はこれらがどの程度進んでいるかを考えると、図2の『どのように学ぶか』については、協同学習や生活指導において実践的研究が進められおり、継続が必要であると考えられる。『何ができるようになるか』については、今養版キャリアプランニング・マトリックス（以下「マトリックス」という。）をはじめとして、様々な教育課程の骨格たる部分が整備されつつある状態であり、これを一層進めていく必要があると考えられる。『何を学ぶか』については、観点別評価と連動して単元指導計画の様式が改訂されたり、指導内容表に指導該当学年が明記されたりするなどして、各学年で創意工夫の基で検討されているところだが、まだこれらが動き出した状態であり、学びの連続性・系統性の検討はこれからといった状況である。また、教務部の平成29年度前期評価には、「教育課程の見直し・合わせた指導から教科学習へという教育課程の大きな転換期に来ている。」とある。そのため、学校教育目標の達成や新しい職業学科として社会に開かれた教育課程を実現すべく、キャリア教育の視点を基礎として、様々な角度からカリキュラム・マネジメントに取り組むことで、生徒のキャリア発達を効果的に促すことができるのではないかと考え、本主題を設定した。



図3 学習指導要領改訂の方向性

【出典：幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）補足資料】

ところで、第7次研究では、学舎ともに生徒の課題を絞り、そこに焦点を当て、指導方法の実践的研究に取り組んできた。しかし、その指導方法を改善・工夫していくことや、あるいは新たな指導方法を取り入れるなど、授業・指導のさらなる改善に向けた実践的研究は継続していく必要性を再認識した。さらに、本校の教育課程（キャリア教育の形）を整理していくことも必要である。マトリックス、指導内容表、年間指導計画、単元指導計画と観点別評価などを整備し、授業・指導の実践へと結び付けていくことで、適正に機能させていくことが求められる。そのためには、教育課程検討委員会をはじめ、全校職員による研究の取り組みへの協力、検討や共通理解を図っていくことが重要である。このような動きと並行して、卒業生や在校生の実態調査を基に、在学中に身に付けさせるべき力は何かをしっかりと把握していくという取り組みも欠かせないものとする。

(3) 第8次研究の方向性

1年次	・全学年単元配列表（第1次案）の作成（P・研推） ・各単元計画の作成（課） ・協同学習をベースとした「主体的・対話的で深い学び」の視点を取り入れた授業実践（課） ・授業振り返り（補助簿を活用した観点別の学習評価）（課） ・振り返りを受けて、単元配列表の整合性の確認（P・研推） （今養版キャリアプランニング・マトリックスの内容の精選）（P・研推） ・模擬株式会社授業実践（各学科） ・寄宿舎研究（舎） ・調査研究（調）
2年次	・全学年単元配列表（第2次案）の作成（P・研推） ・各単元計画の作成（課） ・協同学習をベースとした「主体的・対話的で深い学び」の視点を取り入れた授業実践（課） ・授業振り返り（振り返りレポートの記入）（課） ・振り返りを受けて、単元配列表の整合性の確認（P・研推） （今養版キャリアプランニング・マトリックスの内容の精選）（P・研推） ・模擬株式会社授業実践（各学科） ・寄宿舎研究（舎） ・調査研究（調）
3年次	・全学年単元配列表（確定版）の作成（P・研推） ・協同学習をベースとした「主体的・対話的で深い学び」の視点を取り入れた授業研究（課） ・模擬株式会社授業実践（各学科） ・寄宿舎研究（舎） ・調査研究（調）

※（課）は課題研究、（P）はプロジェクト研究、（舎）は寄宿舎の研究、（調）は調査研究の略

(4) 1～2年次の成果と課題、それを踏まえた3年次の研究内容の見通し

ア 課題研究

昨年度までは、各学年で作成した単元計画を基に、教科ごとに授業研究を行った。協同学習をベースとしつつ、「主体的・対話的で深い学び」の視点を取り入れた授業を計画し、授業後はMT・STともに振り返りレポートを作成することで、教員一人一人の授業力向上を図った。

単元や授業の目標を「主体的・対話的で深い学び」の観点で立てる、授業後に振り返りを行う、他の教員の授業を参観するといった一連の取り組みをとおして、3つの観点についての理解が深まり、具体的な目標設定や授業の構成、教科等横断的な視点での授業づくりができつつある。さらに、こうした授業づくりを全員が意識することで、指導者間の授業前の打ち合わせが自然に増えてきた。

一方で、目標達成のための指導方法の工夫や効果的な教材の準備が難しいという声も見受けられた。また、授業後の生徒の変容について注目し、評価している職員が少なかった。これらのことから今年度は、学年を問わず教科間等で情報共有や研修を行うこと、入念な生徒の実態把握によって学習集団や個に応じた指導方法や教材を考察すること、授業後に生徒の変容を評価し次の授業（指導）につなげることなど、特別支援教育における「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた教員一人一人の専門性を高めていく必要がある。

イ プロジェクト研究Ⅰ

昨年度までは、全学年のシラバス、単元配列表、指導内容表を照らし合わせ、おおむね整合性が取れていることを確認することができた。

今年度は、一つには、各教科の指導内容表が新学習指導要領の「各段階の目標及び内容」に合わせて作成されているか、二つには、シラバスの目標が学年が上がるごとに高次なものになっているかを確認していく必要がある。また、全学年の単元配列表も併せて再確認していく。

ウ プロジェクト研究Ⅱ

一昨年度は、2～3年生のクラスから1名が選出され6名が模擬株式会社委員となり、定期的に活動を行った。昨年度からは正式な委員会となり、各学級から選出された委員9名が一年間を通して委員会活動を進めていった。定期的な活動と人数が増えたことにより活動の幅が大きく広がり、生徒達に主体的な活動を進めていこうとする気持ちが生じてきた。生徒自身が充実した学習となるように、学校祭の仕入れ販売やコラボ商品の開発、ふるさと納税返礼品に関して各学科で知恵を出し合い、ときには、学年の垣根を越えてアイディアを出し合うことで自分たちの活動という意識をもつことができた。

模擬株式会社の取り組みについては、関係各所から評価をいただいている。今年度の取り組みとして、昨年度までの活動をベースとして、委員会活動のより自主的な運営を行ったり、QRコードによる学科紹介を生徒自身で行ったりできるような取り組み等に取り組んでいき、生徒主体の活動と内容の充実を図っていきたいと考える。

エ 調査研究

一昨年度については、職員の就労に対する知識や認識の向上、意識改革を目指すべく、学校内でできることがないかを進路指導部内で話し合い、まずはできるところから着手していくことで教職員の校内での進路に対する認識を変えていくことができるのではないかと考え研究を進めた。昨年度については、一昨年度の調査研究での課題となった点について改善を図ることと、昨年度の成果を深化させていくことに焦点を当てた研究を進めることとした。2年間の成果として、掲示物やコーナーを新設・整備、手引きやパンフレットなどの作成、整合性をもたせられる実習の振り返りツールの整備などがあげられた。課題としては、情報の精査・整備、整合性・系統性、スタンダード作りなどがあげられた。

今年度については、過去2年間の課題の改善を図ることと、成果の深化を図ることを継続して行う。そして、第8次研究の最終年度として、進路指導における学びの連続性・系統性について具体化を図るべくツールの作成などに着手することで考えている。具体的には、現

存の今養版キャリアプランニング・マトリックスに「生涯にわたっての段階」(仮)を新たに設け、各項目を整備することで考えている。そのツールを活用しながら社会に開かれた教育課程の実現を目指し、地域の特色を生かしたカリキュラム・マネジメントに取り組み、生涯を見据えた観点で生徒のキャリア発達を効果的に促すことができるよう研究を進めていくことを考えている。

オ 寄宿舎の研究

「卒業後に向けたキャリア発達を育む指導」を主題として設定し、寄宿舎生活で得ることのできる基本的な生活習慣や、卒業後に必要なスキルの獲得を促す指導を研究してきた。

一昨年度の研究では、研究主題に関わる生活習慣や余暇についての対象生徒を抽出し、生徒の実態に応じた課題に対してどのようにアプローチしていくか考察した。

昨年度の研究では、余暇の自治的な活動がキャリア発達を育み、現代社会を生きるために必要な基礎的・汎用的な能力向上に結びつくと考え、男子棟と女子棟の各棟で研究を推進した。

今年度の研究では、寄宿舎での主体的な学びを生む環境を考え、生徒自身が自主的な生活を送ることができる指導の在り方を研究していく。

(5) 推進計画

ア 研究推進委員会

- (ア) 4つの研究の計画、実践状況等について情報交換・意見交換をすることで、客観的な見方・考え方を取り入れ、今後の実践に向けての方向性を見出したり、各研究の相互作用(成果と課題)を確認したりすることができるような場とする。
- (イ) 4つの研究が連携できるよう連絡・調整する場として機能させる。
- (ウ) 基本的には4つの研究の主担当者に出席を願うが、必要に応じて主担当者以外にも出席をお願いすることがある。

イ 全体研修会

- (ア) 校内研究の意義や目的、推進方法について理解を深める場とする。
- (イ) 4つの研究の進捗状況を把握し、その後の取り組みに向けて意見交換したり、共通認識をもったりするための場とする。
- (ウ) 今年度の研究のまとめ、また次年度の方向性について研究推進委員会が提案し、協議する場とする。
- (エ) 参加者は全教職員を基本とする。

ウ 推進日程

月日	会議・研修	主な内容
4月 7日(火)	全体研修①	研究の概要、昨年度までの研究の確認
4月 21日(火)	第1回研究推進委員会	今年度の研究の見通しについて
6月 8日(月)	第2回研究推進委員会	今年度の研究計画について
6月 12日(金)	全体研修②	4つの研究の計画発表
10月 14日(水)	第3回研究推進委員会	4つの研究の進捗状況の確認
10月 16日(金)	全体研修③	4つの研究の中間報告
1月 27日(水)	第4回研究推進委員会	4つの研究の成果・課題の確認、第8次研究のまとめ、次年度の研究についての検討

2月 5日(金)	全体研修④	4つの研究の最終報告、第8次研究のまとめ
3月 1日(月)	第5回研究推進委員会	次年度の研究についての検討

(6) 緊急事態宣言を受けての変更

以上は4月下旬段階で決定したことだが、その後、新型コロナウイルス感染拡大を受けて緊急事態宣言が出され、5月いっぱいの臨時休校が決定した。また、国内・道内の状況を見ると、再休校になる可能性や、地域や学校の実情に応じた登校の方法をとる可能性もあることから、今年度の研究が予定通りに行えるか、行うべきかについて検討した。そして5月27日に臨時研究推進委員会を開き、その後の職員会議を経て、今後の第8次研究の推進について次のように変更した。

ア 第8次研究の推進計画の変更

(ア) 第8次研究を3年計画から4年計画に改める。

(イ) 今年度（3年次）は、第8次研究主題はそのままに、主題に沿ってできる範囲のこのものを行う。

- ① 生徒の安心・安全を第一にしながら、できること。
- ② 教職員の大きな負担なく、できること。
- ③ 当初計画していた内容のうち、そのままできること。
- ④ 当初計画をもとに、アレンジを加えてできること。
- ⑤ 次年度（4年次）をまとめの年とし、そこにつなげる形で、できること。

(ウ) これを踏まえて次年度（4年次）、まとめの取り組みをする。

イ 今年度の推進計画の変更（5月以降）

月日	会議・研修	主な内容
5月21日(火)	第2回研究推進委員会（臨時）	第8次研究計画の変更について
6月19日(金)	第3回研究推進委員会	今年度の研究計画について
6月26日(金)	全体研修②	4つの研究の計画発表
10月14日(水)	第4回研究推進委員会	4つの研究の進捗状況の確認
10月16日(金)	全体研修③	4つの研究の中間報告
1月27日(水)	第5回研究推進委員会	4つの研究の成果・課題の確認、次年度の研究についての検討
2月 5日(金)	全体研修④	4つの研究の最終報告
3月 1日(月)	第6回研究推進委員会	次年度の研究についての検討

なお、この変更を受けた4つの研究の今年度の計画と実践、次年度の取り組みについては、第2章以下それぞれの研究についての章で述べる。